

中学校 1 年生におけるレジリエンスと強迫性がリアリティショックに及ぼす影響

—入学 3 カ月後, 11 カ月後の変化について—

人間発達教育専攻

臨床心理学コース

M11067I

前田 陽子

【問題と目的】

中学校 1 年生での不登校の急増（文部科学省，2009）やその他の学校不適応の背景として，考えることができるのがリアリティショックである。リアリティショックは，Kramer（1974）が看護師の早期離職の問題から概念化したものである。半澤（2007）は大学生における学業について研究しており，リアリティショックを，入学前に抱いていた学校における学業イメージや期待と，入学後に経験している学業との間の，ズレによって生じた否定的な違和感と定義している。本研究では，半澤を参考に小学校から中学校への移行におけるリアリティショックについて検討する。

さて，中学生におけるリアリティショックの緩和に影響を与える個人内要因として考えられるもののひとつに，レジリエンスがある。レジリエンスとは，困難な環境にさらされているにもかかわらずその環境と調和してうまく適応する過程・能力・結果と定義される（Masten, Best & Garmezy, 1990）。

一方，リアリティショックの促進に影響する個人内要因として考えられるものに強迫性がある。強迫性とは，固苦しく，柔軟性に乏しく，几帳面で，拘り定規な性格傾向である（下坂，1975）。小柳（1999）は強迫性が過度になりすぎることは不適応の源泉になると述べ，強迫性が自分に向けられれば劣等感となるために円満な学校生活に支障をきたすという。

以上のことより，本研究では，小学校から中学校への環境移行を経験する中学 1 年生のレジリエンス

と強迫性の程度がリアリティショックに与える影響を検討することを目的とした。

【調査 I】

〔方法〕調査対象者：A 県 B 市内の公立 C 中学校の 1 年生 121 人（有効回答率 90.98%）

調査：2011 年 7 月実施

材料：質問紙の構成

（1）レジリエンス尺度 森・清水・石田・富永・Hiew（2002）の 35 項目，4 件法

（2）中学生版リアリティショック質問項目 南・浅川・中間・浅川（2011）の 21 項目，4 件法

（3）Maudsley 強迫検査 Hodgson & Rachman（1977）による Maudsley Obsessional-Compulsive Inventory（MOCI）の日本語版（吉田他）29 項目，4 件法

〔結果〕強迫性尺度得点，レジリエンス尺度得点からそれぞれ低・中・高の 3 群にわけた。そしてリアリティショックを従属変数とし，3（レジリエンス，強迫性の水準）×2（性）を独立変数とした 2 要因の分散分析をおこなった。その結果，強迫性高群が強迫性低群，中群よりも，リアリティショック得点が高くなることが示された。つまり，強迫性が高ければリアリティショックも強くなることがわかった。また，女子のレジリエンス高群のリアリティショック「課題負担・時間的切迫感」得点が，レジリエンス中群よりも有意に低かったことから，女子群においてレジリエンスの高さが「課題負担・時間的切迫感」の緩和に影響していることがわかった。

【調査Ⅱ】

〔方法〕調査対象者：A 県 B 市内の公立 C 中学校の
1 年生 137 人（有効回答率 95.80%）

調査：2012 年 3 月実施

材料：質問紙の構成

(1), (2), (3) については研究Ⅰと同様

(4) 日常生活に関する質問項目 古川 (2011) を
改変 朝食の有無, 部活動時間, 就寝時間, 習い事
の有無, 成績, 欠席日数等

〔結果〕強迫性高群が低群, 中群よりリアリティシ
ョック得点が高いことから, 入学 3 カ月後と同様に,
強迫性が高ければリアリティショックも強くなるこ
とがわかった。また, レジリエンス低群において,
男子群より女子群のリアリティショックが高かった。
入学 3 カ月後時点では, 低群における男女の差はな
かったが, 入学 11 カ月後においては女子群が男子
群より高かった。

【結果】

①縦断的検討

〔方法〕調査Ⅰの入学 3 カ月後 (7 月) と調査Ⅱの
入学 11 カ月後 (3 月) の各尺度合計得点ならびに下
位尺度得点について, それぞれ性×時期の 2 要因分
散分析を行った。〔結果〕強迫性尺度合計得点は入学
3 カ月後 (7 月) 時点が高く, 入学 11 カ月後 (3 月)
時点には低くなっていた。また, レジリエンス合計
得点は入学 3 カ月後 (7 月) 時点と比較して, 入学
11 カ月後 (3 月) 時点の得点は有意に低くなってい
た。そして, リアリティショック質問項目合計得点
は, 入学 3 カ月後においては, 男子群と女子群に差
はないが, 入学 11 カ月後においては, 女子群が男
子群より高いことがわかった。

②日常生活との関連性の検討

〔方法〕レジリエンスの水準と日常生活に関する質
問項目との関連性を検討した。〔結果〕平日のゲーム
時間, 行事での役割, 土曜日の部活動時間については

レジリエンスの水準別に結果が出た。低群は中群・
高群と比較して, 平日のゲーム時間「1 時間未満」
が有意に少なく, 行事の役割を「していない」, 土曜
日の部活動が「全くない」が有意に多かった。

③入学 11 カ月後のリアリティショックとの関連性の検討

〔方法〕入学 11 カ月後のリアリティショック得点
を従属変数, 入学 3 カ月後の強迫性得点, レジリエ
ンス得点およびリアリティショック得点を独立変数
としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。

〔結果〕入学 3 カ月後のリアリティショックの程度
が入学 11 カ月後のリアリティショックをもっとも
予測するという結果であった。

④欠席日数との関連性の検討

〔方法〕Pearson の相関係数を用いて, 調査Ⅰの入
学 3 カ月後 (7 月) と調査Ⅱの入学 11 カ月後 (3 月)
の強迫性尺度, レジリエンス尺度, リアリティシ
ョック質問項目の下位尺度得点および合計得点と中学
校 1 年時欠席日数の関係を分析した。〔結果〕入学 3
カ月後におけるレジリエンス「自己肯定感」, 入学
11 カ月後における「強迫的思考・確認」, リアリ
ティショックが欠席日数と関連することが明らかにな
った。

【考察】

本研究の結果より, 強迫性が高い生徒に対する支
援が必要であると考えられた。また, 自己肯定感が
リアリティショックの緩和に影響していることから,
自己肯定感を高めていく継続した取り組みが必要で
あると考えられた。さらに, リアリティショックは
入学 3 カ月後では性差はなく, 入学 11 カ月後では
女子が高いという結果であった。女子生徒に対して
は, 入学後長期間にわたって適応過程を支援する必
要性が示唆された。

主任指導教員 遠藤 裕乃
指導教員 遠藤 裕乃